

国際高麗学会 日本支部通信 (第 30 号)

国際高麗学会日本支部 会長 高龍秀
〒543-0024 大阪市天王寺区舟橋町 2-2 OIC センター5F
TEL 06-6763-2684 FAX 06-6763-5080
E-mail isksj@ams.odn.ne.jp HP <http://www.isks.org/>

巻頭言

学会誌『コリアン・スタディーズ』発行へ

高龍秀(甲南大学、日本支部会長)

2011 年 8 月の理事会で、国際高麗学会日本支部会長職を朴一先生より引き継ぐこととなった。振り返れば 1990 年の設立以来、国際高麗学会日本支部は多くの研究者に支えられて、コリアに関わる広範な分野の研究者間学術交流を行ってきた。日本支部の初代代表を担われた大村益夫先生(早稲田大学)、1994 年から代表になられた故・張年錫先生(当時、大阪電気通信大学)、1997 年から代表になられた滝沢秀樹先生(大阪商業大学)、2000 年から代表になられた文京洙先生(立命館大学)の下で、毎年欠かさず学術大会を開催し、年数度の研究会、「日本支部通信」の発行を続けることで、日本におけるコリア研究者の研究交流の場としての役割を担い、「国際高麗学会日本支部」は特に常連会員にとって他にはない存在として定着してきたと思う。2005 年から代表(後に会長と改称)となった朴一先生の下で、日本支部は多くの新しい取り組みを行ってきた。まず学会設立 20 周年事業として 5 年間の準備期間を経て、『在日コリアン辞典』が 2010 年 11 月に出版された。国際高麗学会日本支部の役員と事務局メンバーを中心に、学会員を含めて 120 名以上の方々が執筆に関わり、在日コリアンの 100 年の歩みを網羅的に記録した辞書として世に問うことができた。同書は、青巖大学校在日コリアン研究所のメンバーにより韓国語に翻訳され、2012 年 9 月に韓国語版が出版され、韓国国内でも在日コリアンの歴史と現状を正確に伝える役割を担うこととなった。また、朴一会長の下で、2011 年より会員の投票により学会理事選出を行うなど規約の改正を行ってきた。

そして 2010 年から準備してきたのが国際高麗学会日本支部による学会誌の発刊である。現在の国際高麗学会では、本部による朝鮮語または英語論文による学会誌『国際高麗学』はあるが、日本支部による日本語論文による学会誌『コリアン・スタディーズ』を創刊しようという試みである。会員の投稿論文にはレフェリー制度を設け、年 1 号学会誌を発行することで、会員に論文投稿機会を提供することができる。学会誌発行により、国際高麗学会日本支部は、名実ともに日本における学会としての役割をより充実させることができると思う。『コリアン・スタディーズ』創刊号への投稿は 8 月末で締め切ったが、2 号以降の投稿は随時受け付けている。会員の出版された書籍の書評や紹介、時局に関わる企画など、国際高麗学会日本支部の特色あふれた、そして学術レベルも高い学会誌として会員各位とともに育てていきたいと期待している。『コリアン・スタディーズ』が発行されることで、「日本支部通信」は今号を最後にその役割を学会誌に引き継ぐこととなる。『コリアン・スタディーズ』への会員の皆さまの投稿、ご意見を期待している。

[目次]

2012 年度学術大会 開催

○ シンポジウム

『揺れる朝鮮半島～金正恩体制と韓国大統領選挙の行方～』

北朝鮮の新体制の経済政策と南北経済関係、対外経済関係	三村光弘	3
北朝鮮金正恩体制の特徴と南北関係の課題	秦熙官	5
コメント～韓国の北朝鮮政策-李彰浩政権の失敗と今後	文京洙	10
三村光弘・秦熙官報告に対するコメント	中戸祐夫	11

○ 自由論題報告

こころの境界を変える隣の社会運動－京都府宇治市ウトロ地区を事例に－	全ウンフィ	12
朝鮮における独自の宇宙論の発展とその終焉	任正赫	13
－「天円地方」説から洪大容の無限宇宙論へ－		

各研究会

◇ 特別講演会

・ 韓国の経済教育におけるカリキュラムと教科書の開発	金景模	14
----------------------------	-----	----

◇ 人文社会研究部会

・ 被害者は語ることができるのか	高誠晩	14
・ 朴一さんの語る在日朝鮮人像・「在日三部作」を読む	藤井幸之助	14
・ 朴一『在日三部作』から何を学ぶか	総谷智雄	14
・ 滝沢秀樹著『私のコリア人間地図』を読む	文京洙	15
	裴 龍	16
・ ある「韓国人研究者」による在日コリアンの民族教育研究	宋基燦	21
－『「語られないもの」としての朝鮮学校』を中心に－		
・ 解放後の朝鮮人学校教科書にみる「民族意識」	池貞姫	21

◇ 科学技術研究部会

・ 非線形回帰モデルにおける予測情報量規準	金大柱・	22
	小西貞則	
・ 分子が渋滞する世界－ガラス転移の物理学－	金 鋼	23
・ Three-Scale Structure Analysis and Thin Film Generation of a New Biocompatible Piezoelectric Material MgSiO ₃	黄輝心	24
－新規生体適合圧電材料MgSiO ₃ のスリースケール構造解析および薄膜創製－		
・ 安定同位体基質プロービング法を用いた水田土壌中における植物遺体由来の炭素フローの解明	李哲揆	25
・ いもち病菌に対するコムギ・オオムギ抵抗性遺伝子の同定	玄康洙	26
・ Determination of Local Chirality in Irregular Single-Walled Carbon Nanotubes Based on Individual Hexagons	金チュンハン	27
・ ヒューマノイドロボットを通じた作業制御アルゴリズムの探求	玄相昊	27
・ 京都大学での43 年間にわたる研究生活	玄丞然	28

【報 告】 第 6 回理事会及び第 16 回総会、第 15 回学術大会		29
第 10 回コリア学国際学術討論会 他		30

【書籍紹介】 金俊行著『現代アジアとグローバリズム』	裴光雄	31
----------------------------	-----	----

国際高麗学会日本支部 2012 年度学術大会 開催

日時：2012 年 5 月 27 日（日） 場所：大阪教育大学天王寺キャンパス 西館 2 F

プログラム

【午前の部】10:00～11:45 自由論題報告

1. 10:00～10:35 全 ウンフィ(大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程)
「こころの境界を変える隣の社会運動 ―京都府宇治市ウトロ地区を事例に―」
2. 10:35～11:10 韓南洙(ハングル学会 日本・関西支会)
「ふたたび、NHK ラジオにモノ申す ―「ハングル」とは言語名か?―」
3. 11:10～11:45 任正赫(朝鮮大学校理工学部)
「朝鮮における独自の宇宙論の発展とその終焉―天円地方説から洪大容の無限宇宙論へ―」

◎第 6 回理事会 12:00～12:45 ◎第 16 回総会 13:00～13:30

【午後の部】13:30～17:00 シンポジウム

<シンポジウム>揺れる朝鮮半島～金正恩体制と韓国大統領選挙の行方～ 報告者

三村光弘(環日本海経済研究所)
「北朝鮮の新体制の経済政策と南北経済関係、
対外経済関係」

秦熙官(韓国仁済大学校統一学研究所長)
「北朝鮮金正恩体制の特徴と南北関係の課題」

コメンテーター

文京洙(立命館大学)、中戸祐夫(立命館大学)

司会 朴一(大阪市立大学)



シンポジウム

揺れる朝鮮半島～金正恩体制と韓国大統領選挙の行方～

北朝鮮の新体制の経済政策と南北経済関係、対外経済関係

三村光弘(環日本海経済研究所)

はじめに―北朝鮮の経済政策の規定要因

1. 金正日時代の北朝鮮経済の変化―未完の改革
 - 1998年憲法改正と経済改革の開始
 - 多くの政策を実質的に変化させたが、制度面での改革は少ない
＝社会の実質的な変化にもかかわらず、変化は黙認ベース
 - 非国営部門の成長と国営部門、政府との接近
 - 「競争」激化による既得権層の反発
 - 国民統制の難しさ(人の移動、ロコミ)、国営部門からの人材の流出
 - 2009 年の貨幣交換とその後の混乱―あるべき姿と現実との乖離
2. 北朝鮮経済の現状
 - 2010 年以降、貿易による外貨収入の増加と体制外改革を通じた新たな経済セクターの建設への努力
 - 経済成長と国民の実感が一致しない(平壤や道所在地に限定した成長)
 - 現在の北朝鮮の発展戦略
 - ① 知識経済型強国建設
 - ② 生産連携(分業)の回復
 - ③ どこを捨て、どこを残すかがまだ不明確
3. 北朝鮮経済の「市場化」の現状
 - 韓国における「市場化」研究とその問題点＝「市場化」の定義の問題
 - 移行経済国と言えるための条件はほとんど満たしていない
 - 何が貨幣経済化され、何がされていないのかをよく見る必要
 - 市場経済の導入のために必要な改革は社会を根本から変える大手術
4. 李明博政権における南北関係の後退と南北経済関係
 - 韓国は5年ごとに政策の方向性が変化
 - 「太陽政策」「包容政策」に隠されたメッセージを読み取ることができなかった李明博政権
 - 「天安艦」事件と南北経済交流の遮断―分断国家の限界
 - 南北間の最後のよりどころ、開城工業団地はなぜ残ったか
5. 北朝鮮の対外経済関係
 - 北朝鮮経済の不確実性を引き受けられることができる唯一の国、中国
 - ① 当面は中国の支援と経済協力が北朝鮮にとっての命綱
 - ② 中国にとって、北朝鮮の安定化は戦略的に重要
 - ③ 北朝鮮にとっては、中国依存からの脱却が中長期的な課題→確実な支援提供者の存在が必要
 - 中朝間の主な経済プロジェクト
 - ① 中朝間の「共同管理・共同開発」
 - ② 中国の下請け(委託加工)
 - ③ 資源供給基地
 - 中朝間の経済プロジェクトの規定要因
 - ① 中国の国家計画、プロジェクト



- ② 中国の地方の経済開発プロジェクト
- ③ 中国の事情に北朝鮮が合わせるかたち
- 北朝鮮にとっての課題
 - ① 中国への依存の深化をどう処理するか
 - ② 中国へのシフトを打ち消す要因
- 朝ロ経済関係の強化
 - ① 2000 年 7 月「朝ロ共同宣言」、01 年 8 月「朝ロモスクワ宣言」
 - ② 鉄道連結事業(2008 年 10 月起工、2012 年 10 月竣工予定)と羅津港の整備
 - ③ 朝鮮半島ガスパイプライン建設
 - ④ 送電線建設事業
- 欧州との経済関係強化の試み
- 経済の本格的回復の鍵となるのは米国の動向と日本の変化

おわりに—北朝鮮新体制の課題

北朝鮮金正恩体制の特徴と南北関係の課題



秦熙官(韓国・仁済大学校)

1. 金正恩への制度的継承

去年 12 月 17 日、金正日総書記の死亡以後北朝鮮体制の安定性に対する疑問が提起されてきた。しかし北朝鮮は今年 4 月第 4 次党代表者会(4.11)と 12 期 5 次最高人民会議(4.13)を開催して金正恩体制への制度的継承を終わらせた。

金正恩は新設された党第 1 秘書と党中央軍事委員会委員長、そして党政治局常務委員に上がったし、国家機構で新しく新設された国防委員会第 1 委員長という職責を与えられた。今や名実共に北朝鮮の最高指導者になったのだ。

もちろん非制度的な権力である首領=最高指導者の位置は、すでに金正日総書記が死亡するやいなや継承されたと見ることができる。首領は後継者が継承することであり、北朝鮮の内部的には正確にいつ後継者になったのか、明らかになったことはないが、2010 年 9 月第 3 次党代表者会で党中央軍事委員会副委員長になり、後継者であることを対内外に公表したと見なされてきた。ただし、私の推定では 2009 年 3~4 月頃党内部会議(中央委員会全員会議など)で後継者と推戴されたと解釈している。

したがって、すでに首領の後継者である金正恩は金正日死亡直後首領になることが北朝鮮の論理であり、昨年 12 月 19 日付労働新聞は金正恩の死亡を知らせる訃告を通じて「指導者である金正恩同志」と呼んだことがある。そして今年 1 月 1 日労働新聞の新年共同社説で「私たちの党と国家、軍隊の最高指導者である金正恩同志の領導によって」という言及が出てきて、以後「最高指導者」という表現が一般化されている。

したがって、非制度的権力である首領と制度的権力である党第 1 秘書、国防委員会第 1 委員長そし

てすでに12月30日軍最高司令官を継承したので、金正恩は名実共に北朝鮮の指導者の地位を備えていると言える。

併せて2月15日キム・ジョンガク総政治局第1部局長に党中央軍事委員会と国防委員会名義で副元帥称号を授け、同日金正恩最高司令官名義でパク・ト Chol、キム・ヨン Chol、チュ・ギョ Chan など23人に対する将軍昇進人事を断行した。そしてこれに先立ち2月9日には126人に金正日勲章を授け、革命元老と権力序列にともなう叙勲、文化芸術家24人に金正日賞を授け、金正日青年榮譽賞104人、金正日少年榮譽賞を101人に授けたことがある。このようにまだ権力序列と関連した変動は現れておらず、金正恩は軍部人事権を確保し、叙勲授与等を通して権力を掌握していくことと評価される。

特に、金正日誕生日70周年記念行事を通じて金正日に対する追悼式を進めながら金正恩の位置づけを強化していくことと評価される。代表的な事業では銅像建立と金正日全集出版、金日成全集完刊(100冊)等を挙げることができ、陸海空軍将兵の儀式(錦繡山太陽宮殿)、光明星節記念大公演<代を継ぎ忠誠をつくそうとします>、‘石多山の文字’等を通して、金正恩に対する忠誠を高揚する契機に活用すると見ることができる。

この他にも全軍を現地指導しながら、軍部隊構成員とひきつづき記念撮影をしつつ、労働新聞1面に掲載する形態を借りて、軍部を掌握して指導しているという位相を人民大衆に持続的に見せることによって、名実共に北朝鮮の最高指導者であることを刻印させようとしている。

このように制度的に最高指導者の位置に上がったし、これを後押しするための多様な事業展開を通じて、制度的権力を確実に固めていっていることと評価される。

2. 党規約および憲法改正にともなう国家機構の変動

第4次党代表者会を通じて、党規約改正を明らかにしたことがあるが、まだ序文だけが公開されただけだ。ただし党規約序文は主体思想の代わりに‘金日成－金正日主義’という新造語を明らかにしており、今後北朝鮮社会が‘金日成－金正日主義’の体系化のために事業を展開していくという予測を可能にしている。

去る2010年9月に改正された党規約では依然として「朝鮮労働党は主体思想を党建設と党活動の出発点として、党の組織思想的強化の基礎として、革命と建設を領導するところとして指導的指針とする」といって主体思想を指導的指針で強調しているけれど、去る4月改正された規約序文では主体思想の代わりに‘金日成－金正日主義’という用語が含まれた。このような用語の変化は内容の変化を伴わなければならない、したがって今後‘金日成－金正日主義’に対する思想事業が大々的に展開する可能性が高いものと見られる。これは思想を体系化および理論化する作業と憲法を始めとする国家の全ての体系で、用語の変化と内容変化にともなう思想教育が展開するということを予告している。

そして言及した通り、秘書局の第1秘書肩書が新設されたし、現実的に党内で最も高い地位を持つという点で秘書局の改編または、改称の変化があると見ることができる。

12期5次最高人民会議で改正された憲法もやはり全文公開はなされていないが、国防委員会第1委員長新設があったので、機構改編または改称があると見ることができる。労働新聞の報道内容によれば、最高人民会議の最初の案件が憲法の修正補充になっていて、修正補充は大きく二種類、序文と国家機構部門で行われている。すなわち序文では金正日に対する業績を‘法化’し、国家機構部門では金正日を永遠の国防委員長に置いて、国防委員会第1委員長職を新設したのを含んでいる。

このような内容を総合する時、金正恩体制は過去の金正日時代の位相を高めるために金正日を永遠の総秘書および国防委員長に推戴したという点に要約できて、主体思想を‘金日成-金正日主義’に拡大発展させなければならない課題を抱えていると見ることができる。

3. 政治エリートの変化と特徴

金正日死亡以後、権力エリートの呼称順序にも大きい変化は現れないでいる。また、金正恩による軍部の人事移動と叙勲授与などが現れながら、金正恩の権力掌握のシステムは完備していくことと評価される。

先に権力エリートの呼称順序を見れば、12 月 19 日に発表された国家葬儀委員会の名簿だけが多少違うだけで、12 月 20～27 日にあった 3 回の錦繡山記念宮殿(2 月 16 日<錦繡山太陽宮殿>と名称変更)参拝で金正恩を含んだ 27～28 人の同じ名簿順序が発表されたし、2 月 15 日金正日誕生日 70 周年記念中央報告大会の主席団名簿発表でもほとんど同一だった。

しかし、4 月 13 日開催された最高人民会議の主席団に対する呼称順序には一部著しい修正が現れもした(資料参照)。特にキム・ジョンガク、チャン・ソンテクの躍進とパク・トチュン、ヒョン・チョルヘ、キム・ウォンホンの登場が新しい関心事案になっている。

概して革命 1 世代は退いていて、金正日と緊密だった人物が金正恩体制の守護者に上っている。代表的人物はやはりリ・ヨンホ(70)とチェ・リョンヘ(62)だ。彼らは二人だけの党中央軍事委員会副委員長と五人だけである党政治局常務委員に選任された。リ・ヨンホは金正日健康不安以後直ちに重用された人物であり、チェ・リョンヘは 2009 年 9 月金正恩が大将称号を受ける時、共に大将称号の授与を受けたし、青年同盟第 1 秘書出身で青年指導者金正恩を補佐するのに適格な人物と評価されたと思われる。彼は革命 1 世代チェ・ヒョンの息子であるが、チェ・ヒョンと金日成の関係は緊密だった。革命 1 世代の座長格であるチェ・ヒョンは 72 年金日成還暦祝い当時、金正日を後継者で擁立する過程で長男継承の原則を強く主張しながら、革命 1 世代の世論を主導した人物として知られている。したがってチェ・ヒョンを眺める金正日の見解は格別であったのであり、彼の息子チェ・リョンヘに対する期待から自身の後継者金正恩を補佐する人物として指名したと判断される。特に金日成誕生日 100 周年記念大会(4.14)と同日举行された武装装備館開館式で彼の位置が金正恩の右側最初に位置しながらリ・ヨンホより近くに同席されたことは、彼を最も影響力ある側近として評価できるという点で印象的といえる。

これに比べて、世間の関心を引いてきたチャン・ソンテク(66)に対する待遇は予想外といえる。その間、党部長(行政府長)と呼ばれながら党事務を総括してきたし、2009 年 4 月にすでに国防委員会副委員長に上がったが、本来 2010 年 9 月第 3 次党代表者会での職責は政治局候補委員に過ぎなかった。むしろ夫人であり金正恩の叔母であるキム・ギョンヒは前日に大将昇進とこの日政治局委員に上がって一部の予想をひっくり返した。また、今年 4 月の第 4 次党代表者会でチャン・ソンテクが政治局委員に上がるには上がったが、過去に彼の目下の人物と評価されたチェ・リョンヘ政治局常務委員より低い位置を示している。かえってキム・ギョンヒは今回の大会で秘書局秘書に上った。秘書局は金正日が後継者(党秘書)時代に強化させておいた党の主な組織だ。政治局が日常的な党の事務を執行する機構というならば、秘書局は第 1 秘書(旧総秘書)を個別補佐する機能を行う。キム・ギョンヒのような人物が党秘書になるということは金正恩と最も緊密な議論を展開する人物であるということ物を語る。

このように見る時、金正恩体制を補佐する核心的人物の役割を総合すれば、チャン・ソンテクが執事の役割を担当し、主な役割はチェ・リョンヘとリ・ヨンホの持分であり、最高決定には叔母キム・ギョンヒが

関与するという解釈が可能だろう。このように金正恩時代を特徴づける制度的継承が順調に完了したし、エリートの変化を通じて金正恩体制の順航を予告していることが事実である。

4. 金正恩体制の政策的課題

金正恩が今後北朝鮮社会を統治していくにあたり、最も重要なのは権力を掌握するのか、思想問題を主導するのか、経済問題を解決するのか、そして対外、対南関係を解いていくことができるのか、に懸っていると言える。

先に思想問題は指導者の地位を確かにする名分の問題ということができる。したがって先代思想である主体思想、先軍思想そして改正された党規約序文で、新しく提示された‘金日成-金正日主義’に対する主導権と解釈権を掌握しなければならない課題が発生する。そして、このためには理論化作業が必須といえるだろう。すでに北朝鮮は今年 1 月 8 日の党中央委員会決定によって主体思想と先軍思想の叢書である『金正日全集』発刊を宣言したことがある。しかも金正恩誕生日に発表したという点で意味があることであり、既存の『金正日選集』(全 15 冊)の拡張形態になるのか、新しい理論での形態を帯びることになるのか(過去の『主体思想叢書』(全 10 冊)とともに)注目しなければならないだろう。ただし‘金日成-金正日主義’をどのように理論化するのか、または『金正日全集』発刊と同じ時期に行うのか、やはり関心事案になっている。この他にも理論化以後の教養事業はどんな形態に展開するのかに對しても、関心を傾ける必要があるだろう。

次に最も大きい課題と言えば、経済問題をどのように解決していくかという点である。南北関係と対外関係が改善されるならば、より効果的であり得るが、現実にはそうは出来ない。

経済難の根本的解決のためには周辺国との関係改善が何より重要だが、核問題に加えて長距離ロケット発射問題が膨らみつつ、国際社会の問題提起はより一層強まる展望だ。

特に、成功の有無を離れて‘光明星 3 号’ロケット発射によって対外的な圧迫が避けられない展望なので、今後北朝鮮の対外関係は‘短期間’順調でない展望だ。これ以上の国際的制裁方法がないという点で著しい変化はないが、‘2.29 合意’にともなう米国の栄養支援が中断されるはずだ。こういう場合、北朝鮮も反発するだろうが、北米関係は当分膠着局面を抜け出しにくい展望だ。

したがって、北朝鮮自ら経済問題を解決していかなければならないが、これに対して北朝鮮が主張するキーワードは‘咸南の火’と‘新しい世紀産業革命’そして‘人民生活問題向上’にあるという。さらに人民生活問題を解くのは「今年の総体的な目標としてとらえ、ここにすべての力を集中しなければならない」(労働新聞 2 月 21 日付社説)という点を強調している。

しかし‘咸南の火’を通じて得られる 1 次鉱物資源を中国の 2 次工業製品と交換する構造は臨時方便に過ぎない。結局、北朝鮮は韓国を始めとする周辺国と関係を回復できないならば長期的に安定的という評価を下しにくいだろう。今年、周辺国の大部分で最高指導者の交替が成立するので、関係改善を始めとする新しい変化の試みが容易ではないという点で見ると、北朝鮮は今年を‘それなりに’耐えるなり、でなければ早く関係を解いていく方法を選択しなければならない岐路にあると言える。

5. 南北関係葛藤深化と課題

北朝鮮軍最高司令部が‘宣戦布告’に近い言及をしている。最近二ヶ月余りの間、目に見える北朝鮮の発言はあたかも戦争を行いそうな危険性を見せている。

最も大きい特徴は過去に存在した条件文が消えたという点だ。例えば「そういうむごたらしい事態を

拒まないならば、私たちの見せしめを味わうことになること」(祖平統書記局報道、2010.8.5)等のように最終通告の形態ではなかった。

しかし「朝鮮人民軍最高司令部特別作戦の行動塑造通告」(4.23)は「革命武力の特別行動がまもなく開始される」であり、条件がない最後通告の形態だ。そして「その武力の行動の対象は南側最高指導者とその側近、そして保守言論メディア」であり、「開始されれば 3~4 分…特異な手段で…根源を火がパッと出るように焦土化してしまうことになるだろう」と述べつつ、最後の文章に「私たちの革命武力は口先だけの言葉ではない」と強調している。

そして、1 日前の 22 日、北朝鮮外務省スポークスマン声明では南側に対する武力に対して「干渉しようとする国があるならば…怒りの矛先を免れなくなるだろう」と強迫している。

このような陰悪な雰囲気を持ってきた文書の開始は 4 月 18 日の最高司令部スポークスマン声明から始まる。「ソウルのど真ん中といえども、私たちの最高尊厳をけなし、刺激する挑発原点になっている以上、その全てのものをまるごと吹き飛ばすための特別行動措置が取られるだろう」といって「清算してしまうための聖戦」を繰り広げるだろうと主張したことがある。

しかし、反面では「機会」としようとする意図も捉えられた。最高司令部スポークスマン声明発表の翌日である 19 日、北朝鮮の「政府、政党、団体」声明では「(太陽節行事非難に対して)直ちに謝罪しなければならない。そうでなければ…傀儡逆賊輩党を永遠にはき捨てるだろう…軽挙妄動を止めなければならない」といって、私たちの反応を待った側面もあったと解釈される。これに対する我が政府の公開された返答は無かったし、同日我が方国防科学研究所は最新型ミサイルを公開した。特に正確性と性能面で世界最高水準であり、北朝鮮全域に打撃を加えることのできる射程距離を備えた巡航ミサイルを「自慢する」という姿を見せ、北朝鮮の強硬姿勢に対抗する発言が続いた。

結局、4 月 21 日平壤市軍民大会を始まりに「痕跡もなく、叩きのめそう」というスローガンの下、毎日北朝鮮全域で群衆大会が進行されたし、4 月 23 日付労働新聞政論は「民族を挙げての聖戦」という題名で掲載された。

このように陰悪な雰囲気は事実上、金正日死亡直後の弔問問題に対する北朝鮮側の不満から始まったし、特に 2 月末から始まった強硬発言で具体化された。2 月 25 日国防委員会スポークスマン声明、3 月 2 日最高司令部スポークスマン声明、3 月 3 日国防委員会内外信記者会見、そして全国的な群衆大会が各地で進行され、すでに南北の緊張高揚が予想されていた。さらに 3 月初めには金正恩、当時党中央軍事委員会副委員長が板門店を初めて訪問したし、戦略ロケット司令部を「現地指導」して、軍事的危機感を高めさせた時点とも一致する。3 月末に開催された核安保首脳会議を前後して危機局面は過ぎ去るかと思われたが、長距離ロケット発射と 4 月 15 日太陽節 100 周年行事を展開する過程で、南北関係を悪化させる素材が北朝鮮をより一層刺激したと思われる。

このように北朝鮮が超強硬一辺倒に打って出るには、色々な原因が存在するだろう。新任指導部の対内的な指導力確保の問題と対外的メッセージを同時に持つと見られるはずだ。すなわち金正恩という若い指導者の権威を確保していく過程で、韓半島危機を活用する側面が存在するという点は自明だ。そして内部的に「強盛国家」指向を標榜しているが、明確な成果というものも探すのは難しい。したがって南北関係悪化を契機に人民大衆の「復讐心」を刺激して、全人民的群衆大会を通じて、結束を固める戦術を採択したと判断しても間違いなことだと見ることができる。

また、長距離ロケット発射で醸し出す国際機構の対北朝鮮圧迫を牽制する効果を狙う行為とも見ることができる。今の状況をめぐって、米国国務省もやはり実際に北朝鮮の武力挑発を排除できないとい

う反応を見せている。この場合、追加対北制裁方針が実行される時の危険性はより一層大きくなり得、したがって北朝鮮の超強硬反応は国際社会の‘合理的’判断の害要因になり得るだろう。

しかし私たちに最も重要な問題は韓半島の危機管理にある。したがって他の要因に対する判断は重要だが、直接的に南北関係で発生する問題を管理していく能力が必要だ。今の局面が発生することになった原因はもちろん北側が提供したと見られるが、これを管理しなければならないのも韓国政府の役割だということは周知の事実だ。

ところで、李明博政府 4 年余りの期間、南北関係を解きほぐすことができる授權能力はいかなる所でも見つけるのが難しかった。互いに非難するのに汲々としたし、相手方に決裂の責任を転嫁することが全部であり、我が国政府は一種の‘戦略的忍耐’方式を使ったのかは分からないが、結果的に北朝鮮の‘クセ’を直すこともできなかつたし、北朝鮮はより一層暴力的な指向を持つ集団として変化したのが現実だ。

去る 4 年間を振り返ってみれば、韓半島の安定を維持できる機会も少なくなかつた。李明博政権の序盤期、北朝鮮は沈黙を守った。そうするうちに 3 月末我が軍首脳部の対北朝鮮核施設を精密に打撃する必要性の言及と統一部の業務報告で 6.15 と 10.4 宣言が漏れることによって、2008 年 4 月から李明博政府を実名非難し始めた。そして 2009 年 8 月、金大中前大統領逝去時に訪問した特使弔意訪問団が青瓦台を表敬訪問しながら雰囲気が変わったし、李大統領に対する実名非難が消えたことがある。さらに南北関係改善のための第 3 国での秘密接触が成り立ちもした。しかし 2010 年 3 月、李大統領に対する実名非難が再開され、天安艦事件で南北関係は深刻な対立状態に陥った。さらに 11 月、延坪島砲撃事件発生で事態がより一層難しくなったが、2011 年 1 月、北朝鮮の祖平統は当局間対話を提案し、さらに金剛山観光再開のための当局間会談を持とうという提案(1.12)を提出した。しかし 5 月、北京での非公開接触で‘お金の封筒’事件が発生しながら関係は再び悪化して、12 月金正日死亡で北朝鮮の事情は非常に敏感な局面になったのだ。以後、我が政府もやはり注意を注いだかも知れないが、南北間のお互いの目の高さは顕著な差を見せたのだ。

歴史的に見る時、過去の軍事政権時期にも数十回にかけて特使を秘密裏に北朝鮮訪問させ、北側高位要人を秘密裏にソウルに招請して、危機管理してきたというのは周知の事実だ。外形的には互いに対立してきたが、細かい努力を通じて韓半島の危機を管理してきたのだ。

今の南北関係で韓国政府は北朝鮮を管理するいかなるテコも持っていない。却って南北関係は対策なき‘チキンゲーム’の様相を帯びている。李明博政府は‘破局を防ぐか、放置するか’選択の岐路にある。

※注および表は割愛した。

(裴光雄 訳)

<コメント>

韓国の北朝鮮政策－李明博政権の失敗と今後

文京洙(立命館大学)



金大中・盧泰愚政権期の和解・協力政策を堅持することも当初は期待された李明博政権であったが、政権発足から 3 ヶ月後には原則的対応の名の下に和解・協力政策からの転換が明らかになった。李政権のブレーンの認識は、10 年間の和解協力政策が北朝鮮の変化を導くどころか金正日政権の延命をもたらしたものであり、なかには先制攻撃さえ主張する研究者もいた。北朝鮮も態度を硬化させ、開城工団事業の停滞、金剛山観光の中断など南北関係が冷却した。2009 年には米国でオバマ政権が成立するが、同政権も李政権のブレーンに影響されていた。その後は北朝鮮もミサイル発射、6 者協議離脱、2 回目の核実験など瀬戸際政策を繰り返し、中国への依存を深めていった。

2010 年 3 月の天安艦事件に韓国政府は 5・24 措置(米韓連合訓練の強化、南北交流・協力事業の中断など)を発表するが、10 月の統一地方選挙では与党が敗北し、対北強硬策が国民の支持を得ていないことが明らかになった。さらに 11 月の延坪島砲撃があり、南北関係は極度に緊張したが、翌年 4 月の補欠選挙でも与党が敗北し、李政権の支持率が著しく低下した。結局、国民の目には李政権の「原則対応」も北朝鮮の変化を導けないどころか、南北関係を極度に緊張させ、北朝鮮を中国に追いやったと映ったのである。

こうしたなかで 2011 年 9 月には統一部長官に柳佑益が新たに就任し、北朝鮮政策の手直しがすすむが、北朝鮮の呼応は得られず手詰まりの状況が続いている。韓国の有権者の関心はグローバル化のもとで疲弊する生活再建に傾き、南北関係についても和解協力による安定化を切望している。保守政権の対北強硬論が何も生み出し得ないことが明らかになったいま和解協力以外に選択肢はないというのが、韓国有権者の最大公約数的な認識となっている。

三村光弘・秦熙官報告に対するコメント

中戸祐夫(立命館大学)



＜地域研究の意義＞

両報告はそれぞれの専門分野はいうまでもなく、研究対象地域に対する(言語的、文化的、情緒的な領域をも含む)深い理解が窺える報告であった。近年の学問的傾向は理論的枠組みを重視し、それに当てはめようとする研究がひとつの有力な潮流をなしているが、これらは実態の把握よりも理論との整合性に力点がおかれる傾向を持たざるを得ず、その結果、実態の詳細な理解が捨象される。しかし、両報告は長年の観察から見えてくるもの(また、感覚的にわかること)に裏付けられた、いわば地域研究の醍醐味ともいえる研究報告であったと思われる。

＜要人らの立つ位置からみる権力関係の分析＞

一方で、とりわけ秦報告に見られたように、要人たちの並ぶ位置や最高指導者との距離などから権力闘争の行方や序列を把握しようとするアプローチはそれ自体興味深い考察であるが、おそらく重要

なことはこれらが北朝鮮の実際の政策にどのような影響を及ぼすのかという点であろう。北朝鮮の政策は唯一指導体制であり、こうした序列や立つ位置の微妙な変化などは実際の政策とはほとんど関連性がないという場合には、こうした分析を行う意義や目的に対する問いも出されよう。

＜北朝鮮による第 3 次核実験の展望＞

北朝鮮は第 3 次核実験を行うのか。この問いに対しては、両報告者ともに米国との関係次第であるという回答であったが、これは過去の主要な見解と比較すると興味深いインプリケーションが導き出される。すなわち、2009 年 4 月の「人工衛星」発射と 5 月の核実験、また、2010 年の延坪島砲撃といったこの時期の北朝鮮の攻撃的な対外行動について、当時、韓国（および米国や日本）では、後継者の実勢作りや金正日総書記の健康問題から生じた権力争いといった国内要因と結び付けて把握されることが多かった。しかしながら、今回の核実験の有無がかりに米朝関係の展開に依存するとすれば、北朝鮮の核実験を規定する主たる要因は国内要因および国際的な要因の何れによって規定されるのか、あるいはそれらの関係はどのようになっているのかという重要な問いが提示されよう。

* * *

自由論題報告

こころの境界を変える隣の社会運動 —京都府宇治市ウトロ地区を事例に—

全ウンフィ(大阪市立大学)

本報告は在日コリアンの「不法占拠」地域、ウトロ地区(京都府宇治市所在)を事例に「在日朝鮮人」という国家・民族的概念がいかに日常生活の影響・変容されるかについて考察する。ここで「在日朝鮮人(以下、在日)」という概念は社会・経済的条件としての構成員の特質のみならず、メディアを通じて政治的な影響によって広がった一つの(日本における)「他者」に対するイメージ・言説として用いている。

現在までの在日に関する研究は 1980 年代以降、大きく二つの方向を持って進められているといえる。一つは、主に歴史学で取り上げられた「都市下層」として在日をとらえるアプローチである(西成田 1997 ほか)。この視座は主に近代日本の歴史において一つの構成要素としての「在日」の階層性に注目した。もう一つはエスニシティとして在日をとらえる視座である(中野・今津 1993 ほか)。この場合、在日は社会・歴史・文化的背景においてニューカマーと区別される集団として定義された(福本 2005)。2 つの視座は相互補完的に在日という集団をとらえているが、在日と区別されるホスト社会の日本人、そして彼らによって在日がいかに他者化されてきたかについては研究対象として注目されなかった。この「他者化」は両者の社会関係という在日がおかれた諸条件を構成する大事な要素である。

本報告では在日からなるイメージの、「人々」の生活レベルにおける階層化・他者化の過程を、ウトロ地区というローカルな集住地区とそこを取り巻く地域社会における変遷から見ていく。分析資料としてはメディア報道(地域新聞)を主に用いた。ウトロ地区は 1943 年京都飛行場建設当時募集された朝鮮

人労働者の飯場をもとに形成され、戦後朝連の支部が置かれた。戦後の失業と貧困は 1960 年代から周辺地域が宅地開発されることによって改善され、現在までも地区内産業として存在する建設業が浮上することで解消されていく。このような居住の歴史とは裏腹に、当地区は戦後直後から地区自体は地域メディアによって在日・左翼過激運動の拠点として大きく報道されていた。そのようなスタンスは 50 年代以後薄まっていくのだが、戦前から続いた差別的報道と 70 年代以降の在日の社会運動からも注目されなかったことで、地区はローカルな場所として経済発展の中で忘れられ、現在までも地域間交流のない状態が形成された。80 年代後半、住民が立ち退きの危機にさらされたいわゆる「ウトロ問題」に対して、社会運動が外部の日本人によって起こり、「となりの住民」に目を向けた事実にはこのような背景が存在したのである。

朝鮮における独自の宇宙論の発展とその終焉 —「天円地方」説から洪大容の無限宇宙論へ—

任正赫(朝鮮大学校)

宇宙論の基本内容は大きく分けて二つである。一つは、我々が住む太陽系およびそれを含む銀河系の形状、そして宇宙全体が一体どのようなになっているのかという構造論である。もう一つは、この宇宙はどのように始まり、または創られ、それがどのように発展していくのか、その終わりはどのようになるのかということの問題とする生成進化論である。構造論は、まず身近なところの星の配置の観測から始まり、太陽系、銀河系の構造へと、その内容を深めて行くので、初期の段階は天文学と同じものであり、その発展の一つの条件は天文学の発展である。生成進化論は、現代科学が発達する以前では、それを実証的に研究することは非常に困難であり、ゆえにそれを発展させるためには、哲学的小および論理的な思考方法が重要である。朝鮮においては天文観測の長い歴史とともに、哲学的探求においても優れた伝統があり、それは宇宙論の発展を促すものとなる。とくに、中国宋代の宇宙論と西洋科学知識の伝来を契機に朝鮮後期に大きな発展を遂げるが、その頂点に位置するのが 18 世紀の実学者・洪大容の無限宇宙論である。

実学を、有用の学問(実用之学)を研究し、事物に関する研究を通じて真理を探究する(実事求是)という意味と解釈するならば、そのなかには当然自然科学的内容も含まれる。洪大容は早くから自然科学分野に大きな関心を持ち、自宅に「籠水閣」という私設天文台を設置して天文観測を行ったという。また、燕行使の一行の随員となって北京を訪れた際には、清の国立天文台「欽天監」を訪問、イエズス会士の宣教師・ハルレンシュタイン(劉松齡)、ゴガイスル(鮑友萱)の二人と会見し、その内容を『劉鮑問答』として残している。さらには実用応用問題を中心とした数学書『籌解需用』を著したが、そんな彼が自己の思想を集大成したのが『鑿山問答』である。

『鑿山問答』は、儒学者として型どおりの学問を修めた虚子なる人物が山中で実翁なる巨人と出会い、彼から「道術に惑わされれば世を混乱させる」という戒めを受けた後、改めて「大道の要」とはなにかと問うところから始まる。そして、天文・気象や風水・神仙、さらに人間・万物の根本と社会発展、中国の変遷などが論じられる。

内容は多岐にわたるが、なかでも地転説は早くから注目され、精力的な研究が行われてきた。当初

はコペルニクスの地動説との関連においてその独自性が議論の的となったが、その後、『鑿山問答』の詳しい検討とともにそこで展開された無限宇宙論こそが洪大容の優れた業績であることが明らかになった。

洪大容の無限宇宙論とはどのようなものなのか？ここでは、まず朝鮮の天文学を概観し、伝統的宇宙観を確認する。次に、朝鮮王朝時代の宇宙論に言及し、洪大容の無限宇宙論の内容を検討する。さらに、同時代のカント、志筑忠雄の宇宙論と比較し、洪大容の無限宇宙論の科学史的意義について考察する。

参考文献

任正赫『朝鮮科学史における近世－洪大容・カント・志筑忠雄の自然哲学的宇宙論』（思文閣、2011）

各研究会

特別講演会 2011 年 6 月 18 日（土）

韓国の経済教育におけるカリキュラムと教科書の開発

金景模（韓国・慶尚大学校師範大学）

※「コリアン・スタディーズ」創刊号に掲載

* * *

第 68 回人文社会研究部会 2011 年 3 月 18 日（金）

被害者は語ることができるのか

高誠晩（京都大学大学院）

第 69 回人文社会研究部会 2011 年 10 月 2 日（日）

朴一さんの語る在日朝鮮人像・「在日三部作」を読む

藤井幸之助（神戸女学院大学、コリアン・マイノリティ研究会世話人）

朴一『在日三部作』から何を学ぶか

総谷智雄（福岡医療福祉大学）

『＜在日＞という生き方』(以下『生き方』)、『「在日コリアン」ってなんでんねん?』(以下『なんでんねん?』)、『僕たちのヒーローはみんな在日だった』(以下『ヒーロー』)。これら「在日三部作」に共通するものは、在日コリアンの実像をできるだけ多くの読者に伝えようとする著者の意欲と、読みやすい記述だ。著者は、芸能界・スポーツ界・実業界などで活躍する在日コリアンたちを功成名遂げた「ヒーロー」としてのみ描くのではなく、彼らの葛藤や周囲の人々たちの証言などを紹介することにより、在日コリアンを取りまく日本社会のさまざまな問題点を浮き彫りにしている。これは、『生き方』の「あとがき」で述べられている「日本社会のもう一つの断面」が見えてくるということだ。

日本社会の問題点に関する著者の的確な指摘は、「糾弾」では決してない。『なんでんねん?』の「あとがき」において、「在日コリアンが直面している課題は、日本人が直面している、あるいは日本社会に突きつけられた課題でもある」と記されているように、著者は日本人の読者たちに、「共に課題に取り組んでいこう」と呼びかけ続けている。

『生き方』が出版された 1999 年から、『ヒーロー』が書店に並ぶ 2011 年まで、在日コリアンを取りまく社会状況は相当に変化したが、日本人が抱く差別意識・偏見は、依然として維持されており、「高校無償化」から朝鮮高校が排除され、一部自治体が朝鮮学校への補助金を凍結するなど、むしろ悪化している事例もみられる。

前述した著者の「共に課題に取り組んでいこう」という呼びかけに、どのように応えるのか。「在日三部作」を通して在日コリアンの実像を知り、「日本社会のもう一つの断面」を知った日本人読者がなすべきことは、あまりにも明白だといえよう。

第 70 回人文社会研究部会 2012 年 1 月 28 日(土)

滝沢秀樹著『私のコリア人間地図』(御茶の水書房、2011 年 9 月 25 日)を読む

◆時流に流されない学問の深さ

文京洙(立命館大学)

本書は、中国朝鮮族と著者との交わりと絆が記された第 1 部(延辺の農村風景と人間地図)、統一問題からアイルランド問題や大阪コリアタウンの朝鮮族、さらには韓国の政治・経済発展等々、多岐にわたる論点を綴った第 2 部(コリア斯文)、さらに『金日成回顧録』を批判的に検証した第 3 部(朝鮮現代史への証言と歴史の再創造)からなる。

本書の多岐にわたる論点を貫く方法や論理を突き止め、これについて論じるには、評者はいかにも力不足である。だが、本書と向き合うにあたって、あえて私自身の関心を示すと、一国史的枠組みがつよいとされる大塚史学の系譜に属する著者が今日のグローバル化という現象をどのように捉えるのか、ということに尽きる。グローバル化とは時代を画する現象であり、中国朝鮮族が私たちの日常の同伴者となり、社会科学の重要な論点となるのも一面ではこれに関連していよう。

本書でも朝鮮の統一問題との関連では「国民国家という枠組自体を相対化して世界の現実を認識する必要」が語られ(p.154)、北アイルランド問題にかかわっては「国民国家のわくに呪縛されない解決の方式」が論じられている。一方で、〈国民〉としての Nation の相対化は語られても、〈民族〉としての Nation、もしくは民族主義への確信はほとんど揺らいでいない。「国民国家の相対化という論理をその

民族主義自体が内在化するとき、その歴史的意義は更に深く確実なものになるだろう」(p.166)ともされる。そこに、時流に流されない、そして私たちにはおいそれとは立ち入れない「学問の深さ」といったものを改めて垣間見る思いがする。

さらに、この民族の問題ともかかわって、歴史の責任主体たる「日本人」としての深い自覚も本書の記述に通底しているであろう。この点は、戦後の日本人による朝鮮(史)研究が培った最良な姿勢や論理を物語っているのかもしれない。

◆キーワードは「人間＝人」

妻 龍(大阪経済法科大学)

「まさにやりたい放題、書きたい放題」これが、本書が届いてから、その日のうちに本書を読み終えたときの素直な感想である。これが「一気に読まれた者」としてのささやかな「抵抗の弁」である。

299 ページからなる本書の半分は中国朝鮮族自治州紀行、四分の一が、著者が 1999 年から 2011 年までの間にしたための韓国、北朝鮮、中国(朝鮮族)に関する文章、そして残りの四分の一が金日成の抗日闘争に関する著者の蓄積を主に『金日成回顧録』との対比の中で論じたものである。

最初に指摘しておきたいのは、この構成及びそれぞれの分量は、実は、著者の最近の知的関心の構成比と分量を反映しているのではないだろうか、という点である。過去約 40 年間を気鋭の経済史家として走ってきた著者の知的関心領域が、どのような過程を経てここに至ったのか、という問題と併せて興味深い。

その 40 年間のキーワードであるが、私なりの結論からいえば、そこにはいつも「人間＝人」がいた、ということである。著者の「人」への愛着(それは「裏目」に出ることもしばしばであるのだが)、著者の知的関心とそこへつながるすべての関心には、常に、「人」が介在している。周囲の人により刺激され育まれる関心を「学問領域」に押し広げ、最終的には本にまでしてしまう…。なんとも、うらやましい限りである。

著者が「人」などといった不確実な存在ではなく、冷徹な事実のみに関心を向ける「職業的研究者」であったならば、これよりはるかに「学術的な本」を数多く出版してきたはずである。今から 27 年前、私がまだ大学生であった頃に朝鮮史研究会の会場で著者の発表を一聴衆として聴かせていただいた時の私の眼に、著者は「立派な職業的研究者」として映っていた。ということは、その後、周囲の多くの人々がこの学者を感嘆せ、この期に及んでは自分の「人間地図」をお茶の水書房から本として出版してしまうまでに「籠絡」した、と言えないだろうか。あるいは、実はその頃からすでにそうであったのだろうか…。

本書「人間地図」は、いわば「滝沢秀樹を籠絡した人のネームリスト」となっている。そして、そういう私もそのリストの片隅に載っていることを告白しなくてはならない。勝手なことを言わせてもらえば、それは「心地よい籠絡」であったはずであり、ここに著者と周囲の「約束された矛盾」が存在する。著者を「籠絡したかもしれない一人」として、責任と達成感という対立する感情を持って、本日、著者の最後にはならない所謂「最後の単著」に拙いコメントを付したい。

第一部 延辺の農村風景と人間地図

さて、本書の内容のすべてについて論評したり、ましてや解説を加えるなどは、私の手に負える仕事ではないのでいくつかの論点を提起することで、責任を果たしたい。

本書で最大のページを割いて展開されるこの第一部に、「書きたい放題」の正体がある。著者の周囲を固めている「籠絡功労者」が次々登場し、その一人一人に人物評(それもかなり個人的な)を付している。私自身は、そのうちの多くの人たちのことを「分かってしまう」ので、悔しいけど楽しいが、「分からない人」はどうなのだろうか？

中国朝鮮族というテーマに「人」と「風景」を介在させることで、中国朝鮮族のひとつの「像」を与えようとしている著者の試みは成功している。それを何かの「亜流」であったり、「分派」ではなく、そのものとして捉えようとする試みが、数多くの登場人物と地域を登場させているのだが、一方でそれが全体の「分りにくさ」の原因にもなっている。

その点について著者は、中国朝鮮族問題の扱い方について、下記のように記している。

p15 私が意識しているのは(中略)「コリアの一部としての中国朝鮮族」である。とはいっても、(中略)中国の公式立場とは異なった理解をする者も、当然ない。

中国朝鮮族に対する著者の意識は、明らかに「コリア寄り」である。あえて「コリア」と表記したのは著者の苦心の表れであろう。著者の朝鮮族への思いが上記の「公式立場」と異なることは明らかである。

中国朝鮮族への「偏見」に対する著者の立場は、明らかに朝鮮族寄りである。本書には、そういった箇所が数多く存在する(p14、p37 など)。その多くが、韓国人との関係の中で、言語的、経済的な「優劣論義」の虚しさを指摘しているのであるが、不思議なことに中国＝漢族を含んだ構図、関係を指摘する箇所はほとんど見当たらない。これは、やはり著者の基本的立場が、中国朝鮮族問題は「コリア問題」である、ということを露呈している。そして、朝鮮族の立場に配慮した記述であるが、これは著者の現在の人間関係を如実に物語っている。ここでも、また、「人」である。

私がこの論点を提起するのは、著者の中国朝鮮族へのアプローチは、朝鮮近現代史の空洞を埋めることを目的としており、よって、南北を含めて朝鮮史の構成部分へのアプローチとなっていることが明らかであるためである。

その「本音」は、著者の前著である『朝鮮民族の近代国家形成史序説－中国東北と南北朝鮮』(御茶の水書房、2008 年 11 月 25 日)においては明確に言及されているが、ここではそれが大いに語られないことがない。

著者の中国朝鮮族への「愛情」と学問的範囲設定としての「コリアの一部」という線引きが、本書全体を貫いているところが「難しさ」の正体であり、それが「人と学問」の性質の違いであることに気づかなければ、本書はまさしく「書きたい放題」の一冊に映ってしまう。なので、著者はこの本を「中国朝鮮族への旅」の続編と「強弁」しているが(はしがき、iv)、本書の読み方として正しいのは『朝鮮民族の近代国家形成史序説－中国東北と南北朝鮮』とセットで読むことであることを指摘しておきたい。

この作業は大変な作業である。というのも、本書は、著者の「人と風景」に係わるストーリーと、学問的知見が至るところに散りばめられているからである。通常なら、「人と情景」は学問的知見を支えるべくひっそりと紹介されるのであるが、本書ではほぼ「メイン」の位置を占めている。正直、その合間に著者の鋭い観察眼による指摘と批評などが挿入されている。愛情たっぷり、ユーモアたっぷりの文章の波間に、著者が積み上げた知見と現代への鋭い指摘が顔を出すのであるが、それは、ときに繰り返し、ときにひっそりとその存在を主張するのである。

中国朝鮮族側に立つての韓国社会評価、脱北者問題からみる日本社会への苦言など、「なるほど」と思わせる内容は、エピソードの合間にサラリと挿入されている。そればかりか、中国朝鮮族の歴史や地位に関する非常に重厚な話題も、人々との交流の中で「聴いたこと、感じたこと」として紹介され、最後に、「日本人としての『責任』」に触れることも忘れない。実は、この「日本人として」が滝沢著作の特徴でもある(p113)。

整理すると、どうやら著者の「中国朝鮮族への旅」は、著者自身が積み上げた知見、結論に「人の感触」と「風景」を加えることで、ゆるぎない「確信」とすることを目的としているようである。この拙い書評を書きながら、以前著者と議論(というより、教示を受けた)「朝鮮土地調査事業」に関する「データと人の感触」に関する話を思い出した。社会科学、とくに歴史を学ぶ者がデータや書籍だけに頼って自説を主張することの功罪、とりわけ、日本と東アジアの近現代史の中でそれがきちんと語られることは少ない。そのことを早くから主張し、実践してきた著者が本書で語りかけるもう一つの「目的」については、正當に評価されるべきである。

それにしても、第一部の締めくくりが「期待の新人」で、最後の一文が「나의 사랑 Korea 안녕! (僕の好きな KOREA, 元気で!)」である。やはり、やりたい放題、書きたい放題で、かばいようがない…。

第二部コリア斯文

朝鮮半島に係わる研究者として、「何でも知りたい、どこにでも係わりたい」という著者の強烈な意識は、そのまま朝鮮半島を取り巻く「あらゆる現実！」に対する著者の係わり方と関連している。

その意味で、この第二部は強烈である。

下記の表は、第二部に収められている 20 の「作品」を、私なりに若干アレンジしてまとめた一覧であるが、こうなると、もう手がつけられない。

No	テーマ	時期	分野
1	南北統一	1999.08	政治 1
2	読書との夢想	2000.11	文化 1
3	大阪在住朝鮮族	2002.06	社会 1
4	拉致問題	2003.01	政治 2
5	瀋陽紀行	2003.02	歴史 1
6	北朝鮮の「核疑惑」	2003.03	政治 3

7	平壤紀行	2003.03	紀行 1
8	うたごえ喫茶回想	2003.07	その他 1
9	韓流文化人としてのテレビ出演顛末	2004.08	その他 2
10	第二次平壤遠征	2005.02	紀行 2
11	師弟同行韓国旅行記	2005.07	紀行 3
12	中国山東省の「新韓国」評価	2005.09	社会 2
13	「竹島」問題	2006.02	政治 4
14	新村無情	2006.06	紀行 4
15	渤海遺跡探訪記	2006.12	歴史 2
16	チャングム巡礼旅行の歴史地理的考察	2009.06	歴史 3
17	安山多目的旅行記-外国人の街	2007.12	社会 3
18	「満州の夕日」を見るに	2008.02	歴史 4
19	布施で北朝鮮映画を観た	2010.08	文化 2
20	韓国の政治・経済発展の軌跡と現段階	2011.05	政治 5

この 20 の文章のすべてにコメントを付すなど、到底不可能である。それこそ、著者の「思う壺」で、的外れなコメントをしたところで、後々までいびられるのは目に見えている。そこで、「やりたい放題」には「やりたい放題」で対抗することとし、私の関心部分だけを抜き取って、コメントを付し、問題を提起したい。

第二部の最初(1)と最後(20)では 13 年の開きがあるが、テーマは、ある意味同じである。南北朝鮮の統一問題を社会の内側(内因)と外側(外因)に整理して論じたもので、著者の方法論とその説得力が表現されている。

著者は、本書の「はしがき」で、「思索の過程をそのまま記録する」としているが、同様の方法論、アプローチと検証の結果として、何が変化し、何が変わらなかったのかは、是非、明らかにしてもらいたい。

かつて日本が植民地にしたという歴史的事実が同じであるにもかかわらず、北朝鮮を「理解不能な奇妙な社会」として片づけてしまう日本の風潮は変化していない。変化がないどころか、その間の小泉訪朝、平壤宣言、そして拉致問題などの大きな動きは、拉致問題だけにスポットライトが当たる形でさらに進行している。著者が「日韓が歴史的に担った役割(=反共最前線と後方基地)」に起因する「誤った韓半島認識の定着(p152)」と呼んだものは、現在、どういう経過を経て、どうなったのだろうか。「拉致問題の被害者である日本の国民として」、その「認識」をどう整理するのであろうか。

在日の社会への評価はどうなのだろう。著者が南北統一を目指す過程で「在外コリアン」にかける(た?)希望は(pp.160-161)、13 年という歳月と幾多の「イベント」を経て、今、どのようなものとなっているのか。在日の社会に広がる「祖国への失望と忘却」、「日本人化」の波は、著者の「希望」に何かしらのインパクトを与えているはずである。それに答ええないのは、やはり「日本人だから」なのか。

多様な「問題点」が、ここには存在している。実は、第二部の 20 の文章は、その多くに答える形をとっている。上記一覧表の 7 番 10 番の「紀行」は、著者が北朝鮮を「ズバツと斬れない」理由が記されているが、注目すべきは、著者のその「思い」はその前の 3 番ですでに表明されている、ということである。一見バラバラに見える構成が、実は、著者の関心への「回答」として用意されている。

そして、そこでもやはり「人と風景」が著者の「主張」を支えており、また、ときに「切れ味」を鈍らせている。ただし、実は著者自身がその「鈍りの正体」を十分自覚しているところに、著者の苦悶がある。

これが滝沢秀樹なのだ。

著者の「コリアへの視点」は「いちいち」優しい。誤解を懼れずにいえば、社会・歴史分析における厳密さが、「人と風景」の介在により、「日本人だから」というブレーキがかかってしまう、と感じるのは私だけであろうか。この「優しさ」が、ときに感じる、著者の「分かりにくさ」の正体でもある。

第三部 朝鮮現代史への証言と歴史の再創造

「1945 年以後に朝鮮半島に成立した二つの国家の正統性」という問題に、著者は大きな関心を持ち続けている。韓国と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の「正統性」論争は、とくに 1961 年の朴正熙政権成立後には「北」に分があり、韓国政権担当者の劣等感を刺激してきた。要は、朝鮮が植民地にあった時代に「あなたはなにをしていたのですか？」ということである。

この大きな問題に関心を持ち続ける著者にとって、北朝鮮政権の正統性に直結する「白頭の血脈の始祖」である金日成の「自伝」を読み、検討を加え、検証を施すことは、まったくもって自然である。但し、著者本人も文末(p306)で認めているように、これは「手始め」の文章である。「(北朝鮮の)国家の成り立ちや支配的思想の内容を客観的視点で冷静に分析したり、まして内在的に理解しようとする試みが殆ど皆無であり、(このような)考察は時代が要求している(p291)」という著者の指摘は、もつともである。さらに言うと、奇しくも北朝鮮が「三代目」になった今日状況において、「おじいちゃんの時代＝昔の考証」は、以前よりはるかに取り組みやすい課題となった。

「正統性競争」に関しては、南北共に「傷」があるからこそ、それを隠すために自らの「正しさ」を誇大に宣伝(ときに創作)し、相手を誹謗してきた歴史がある。もう少し詳細に述べると、北は自らの「抗日武装闘争」を「神話化＝誇大化/美化」し、南はそれが「神話=嘘である」ということの喧伝に力を注いだ。相手(南)との差を最大限に広げようとした北と、相手を「引きずりおろし」自らの過去を「相対化」することで、「正統性」を主張しようとした南が、この問題の主人公である。

とすると、ここでは「何が真実で、何が真実ではないか」という作業も重要な意味を持つ。そのことは、本書の中でも一部触れられてはいるが(1945 年 8 月の「総攻撃」に関する部分など)、当然、十分ではない。それは、本書が、そこに書かれた史実の一つ一つを否定あるいは肯定する、といった「選別」作業を主な目的としていないからに他ならない。付記したいのは、その作業は、実は「書いた人々＝北朝鮮の人々」の手によって行なわれるべきである、ということである。それは、北朝鮮の国内外の状況の劇的な変化が伴うことで、私はそれを展望する術を持たない。

個人的な体験のレベルの話であるが、この件について少し補足したい。金日成回顧録を読んで感じた私の感想は「へ～、ここまで書いたか」というものであった。例えば、当時の教科書には 1932 年の朝鮮人民革命軍の結成式で、軍服に身を包み整然と並んだ数百名の兵士を前に、総大将である若き金日成が演説をする絵が載っていたが、当時「こんな立派なものではなかったけど、このくらいの意義がある出来事で、また、正規軍だというプライドを持って戦ったという『気持ち』を表現したものだ」と教えられ、「なるほど、そういうものなのか」と「妙に納得して」受け止めたことをはっきりと記憶している。また、

著者が「抗日闘争の主人公たちにとっては最も深刻な《恥部》である(p.304)」とした「民生団事件」に関しても、金日成の功績として大きく取り上げられていたことも記憶しており、その「記憶」と「回顧録」の内容に大きな齟齬はないことも付記しておく。個人的な感触と言われればそれまでだが、「回顧録」は北朝鮮の正統性の始祖である金日成の名前を冠して出版される以上(本当の執筆者がだれであったとしても)、「必要以上の誇張や嘘」は巧妙に避け、「歴史を歪曲・ねつ造した」という批判をいたずらに受けないように「十分注意」した内容となっている、と見るべきである、と考えている。

東アジアの近代国家形成に関する研究や書物を挙げるときりがない。「近代・現代の出発点」、現に存在する「国家の成立」というテーマは、実に重く難しいテーマであると同時にいたって「現実的」なテーマでもあり、そういった事実が、数多くの解釈に「存在根拠」を与えてきた。とりわけ、今なお自らの「正統性」を互いに主張し続ける朝鮮半島の二つの国家にとって、その国家形成史は自らの「権力の正統性」に直結する問題として重く認識され、「他の解釈を許さない」問題、言い換えるなら「思想性」の問題として取り扱われてきた。この状況は、根本的には、今なお続いており、それゆえに敏感で「扱いにくい」テーマでもある。そこに、南北の事情を「分かり過ぎている」著者が斬りこむのは、まさしく著者の「覚悟」を物語っている。だから、本書は著者の「最後の単著」にはならないのである。

著者の膨大な作業に裏打ちされた大胆な発想は、本書においても、いかに発揮されており、それは、朝鮮近現代史の課題を照らしている。朝鮮近現代史の「空洞(それは、当然著者が語る東アジア史のそれでもあるが)を埋める作業」の意義が著者を突き動かしている。

第 71 回人文社会研究部会 2012 年 8 月 1 日(水)

ある「韓国人研究者」による在日コリアンの民族教育研究 —『「語られないもの」としての朝鮮学校』(岩波書店、2012 年 6 月)を中心に—

宋基燦(大谷大学)

第 72 回人文社会研究部会 2012 年 10 月 20 日(土)

解放後の朝鮮人学校教科書にみる「民族意識」

池貞姫(愛媛大学)

1945 年 8 月 15 日の解放以降、日本に残留した朝鮮人児童に朝鮮語を教える「国語講習所」が日本全国で 200 を超え、朝連の指導の下 1946 年 4 月頃から徐々に教育機関としての体裁を整え、学年別の学校に体系化していくこととなる。朝連の中央文化部では「初等教材編纂委員会」が新設され、教科科目を教える基盤となる教科書の作成が急務となった。この教科書作成の重責を担ったのが、当時朝連で活動していた若きインテリたちであった。

当時作られた教科書の多くは、現在アメリカのメリーランド大学内にあるブランゲ文庫に収められて

いる。このコレクションは、GHQ 戦史室に配属されていた G. W. ブランゲ(1910-1980)が、GHQ による検閲対象となった資料群を、検閲が廃止される 1949 年 10 月以後、本務校のメリーランド大学に移管したものが発端となっている。これには、在日朝鮮人による教科書(国語(朝鮮語)、地理、算数、音楽、美術、歴史など)も無論含まれている。なお、地理の教科書である『初等朝鮮地理:全』(1946)の完成本には、ゲラ刷り本があり、検閲局によって 7 カ所の削除処分を受けている。

教科書は、すべて朝鮮語で書かれており、朝鮮語習得に何よりも重点が置かれていたということが如実にわかる。また、国旗や国花を初めとして、民族衣装、朝鮮の諸地域、風物など数々の民族的象徴や歴史的人物・民族的事業を度々取り上げることで、朝鮮的なものになじませ、肯定的なイメージを与えようとする意図が顕著であった。さらに、教科書は、左翼的な立場の朝連によるイデオロギーの普及というよりは、何よりも基礎学力の養成を重要視していたことが窺える。教科科目を効果的に教えるために、学年ごとに子どもの発達段階に応じた内容で教科書を構成したり、知識の注入にとどまらず、日常生活と結びつけて教えようとする工夫や姿勢が随所に見てとれる。

今後は、当時の朝鮮学校の教科書や関連資料をさらに発掘し、教科書執筆者たちの来歴を調査するとともに、日本人教育者の協力関係なども含めて各教科の教科書がいかにより作成され、何が目指されていたかを綿密に調べていきたい。

* * *

第 40 回科学技術研究部会 2010 年 12 月 19 日(土)

非線形回帰モデルにおける予測情報量規準

金大柱(九州大学大学院数理学府)、小西貞則(中央大学理工学部)

1. はじめに

予測分布とは、将来新たに観測されるデータの予測を行うことを目的として、現在得られているデータとモデルのパラメータに関する事前分布に基づき、ベイズアプローチにより導出される将来新たに観測されるデータに関する分布(以下、ベイズ型予測分布)である。予測分布モデルに対するモデル評価基準として、予測情報量規準(PIC; Predictive Information Criterion)が提案されている(Kitagawa (1997))。

本報告では、基底展開法に基づく非線形回帰モデルを仮定し、PIC の導出を行った。誤差分散を未知パラメータとし、事前分布として逆ガンマ分布を仮定した場合、予測分布がスチューデントの t 分布となる(Denison et al. (2002))ため、PIC の導出は困難となるが、ラプラス近似を用いることによって PIC を解析的に導出し、基底関数の個数と調整パラメータを選択する手法について考察した。また、数値実験を通して、他のモデル評価基準との比較を行った。

2. 基底関数展開に基づく非線形回帰モデル

1 次元目的変数 Y と p 次元説明変数ベクトル $X = (X_1, X_2, \dots, X_p)^T$ に関して観測された n 組のデータを $\{(x_i, y_i); i=1, 2, \dots, n\}$ とする。このとき、説明変数と目的変数の間に次の基底展開法に基づく非線

形回帰モデルを仮定する。

$$y_i = w_0 + w^T b(x_i) + \varepsilon_i, \quad i = 1, 2, \dots, n.$$

ここで、 $b(x) = (b_1(x), b_2(x), \dots, b_m(x))^T$ は m 次元基底関数ベクトルとし、 $w = (w_1, w_2, \dots, w_m)^T$ は未知の m 次元パラメータベクトルとする。ここで、 w_0 は切片である。また、誤差変数 ε_i が互いに独立に平均 0、分散 σ^2 の正規分布 $N(0, \sigma^2)$ に従うとすると、基底展開法に基づく非線形回帰モデルは、以下のよう
に与えられる。

$$f(y_i | w, \sigma^2) = (2\pi\sigma^2)^{-\frac{1}{2}} \exp \left\{ - (y_i - w^T b(x_i))^2 / 2\sigma^2 \right\}.$$

3. 予測分布と予測情報量規準PIC

上述のような事前分布を設定すると、ベイズ型予測分布はスチューデントの t 分布に従うことが知られている。ベイズ型予測分布のモデル評価基準である PIC は、予測分布とデータを生成した真の分布との K-L 情報量の推定量として導かれ、以下のように計算することが出来る。

$$\begin{aligned} \text{PIC} = & n \log(2\pi) + n \log(\hat{\sigma}_{mode}^2) + (1/\hat{\sigma}_{mode}^2)(y - B\hat{w}_{mode})^T (y - B\hat{w}_{mode}) \\ & + 2(\sigma^{2*}/\hat{\sigma}_{mode}^2) \text{tr} [B(B^T B + n\lambda I_n)^{-1} B^T]. \end{aligned}$$

ここで、 $\hat{w}_{mode}$ 、 σ_{mode}^2 は、事後分布の最頻値である。また、真の分散である σ^{2*} には最尤推定量を代入し数値実験を行った。このようなモデル評価基準に基づき、基底関数の個数 m 、調整パラメータの値 λ の選択を行った。詳細は web 上に公開されている詳細論文を参照されたい。

Denison, D. G. T., Holmes, C. C., Mallick, B. K. and Smith A. F. M. (2002). *Bayesian Methods for Nonlinear Classification and Regression*. Wiley.

Kitagawa, G. (1997). Information criteria for the predictive evaluation of bayesian models. *Communications in Statistics-Theory and Methods*, 26, 2223-2246.

第 41 回科学技術研究部会 2010 年 1 月 29 日(土)

分子が渋滞する世界—ガラス転移の物理学—

金 鋼(分子科学研究所)

ガラス転移とは、凝固点以下の過冷却状態で構成する分子がランダムな配置のまま運動が凍結してしまうことであり、金属、高分子、分子性液体、コロイド分散系など様々な物質群で共通して見られる有史以来の良く知られた現象である。これをガラスの定義とすると、窓ガラスや食器に限らず、我々の身の回りには、ガラス様物質が満ち溢れていることに気がつく。つまり、ペンキや泥、豆腐やゼリー、さらには砂山も広義なガラスといえる。また我々生き物が外気温の変化によっても細胞内が結晶化することなく生きていけるのは、ランダムさを上手に制御し機能しているからで、ある意味ガラス的物質と言ってよいかもしい。さらに昨今では、液晶表示板やグラスファイバーなどの高機能性材料としても開発、応用されガラスのランダムさを制御する重要性は一層増している。

特に過冷却されガラス転移点近傍になると、粘性率や緩和時間といった輸送係数がわずかに数ケル

ビン程度の温度幅で10 桁以上も増大し、分子振動から非常にゆっくりした構造緩和まで様々な時間スケールの運動モードを有することが大きな特徴として知られている。ところが、ガラスの分子配置は液体の瞬間的な配置と区別がつかないほどによく似た構造を維持したままであり、「なぜ分子の運動性が急激に緩慢になるのか？」というガラス転移の本質的なメカニズムは未解明のままである。この研究は実際の材料設計といったエンジニアリングの問題に関係するだけでなく、純粋にアカデミックな観点から統計力学における最後の未解決問題とも言われており、世界中の研究者が理論・実験・計算機シミュレーションから精力的に研究を進めている。講演では、通常の液体や固体とは異なるガラスの奇妙な性質について、著者が関わった分子動力学シミュレーションと液体理論に基づいた解析手法による結果を紹介したい。

第 42 回科学技術研究部会 2011 年 3 月 20 日(土)

Three-Scale Structure Analysis and Thin Film Generation of a New Biocompatible Piezoelectric Material MgSiO₃ —新規生体適合圧電材料MgSiO₃のスリースケール構造解析および薄膜創製—

黄輝心(同志社大学大学院生命科学研究科)

本研究では、Bio-MEMS用センサおよびアクチュエータに適用可能な新規生体適合圧電材料のスリースケール解析手法の開発およびMgSiO₃圧電薄膜の創製を行った。

現在、チタン酸ジルコン酸鉛(PZT)およびPZT系圧電材料が発生力および応答速度に優れることから種々の電子機器に広く適用されている。しかしながら、欧州においてRoHS指令およびWEEE指令が発令されたことにより、鉛などの有害物質を含む材料の使用が規制されている。そこで、LiNbO₃やKNbO₃、Bi系圧電材料などの鉛フリー圧電材料の開発が精力的に行われているものの、これらは主に環境に適合する新規材料の開発を目的としている。そのため、生体内埋め込みあるいは人体に直接接触する医療機器への適用は考慮されていないのが現状である。さらに、NbやBiなどはレアメタルであり資源が乏しく高価であることから、これらを用いた圧電材料の量産化は困難と考える。以上のことから、生体適合圧電材料の系統的な開発が望まれている。

従来、圧電薄膜の結晶成長性および特性評価解析手法として分子動力学法や密度汎関数法に基づく第一原理計算が用いられてきた。分子動力学法では、既存圧電材料を対象として結晶成長性評価は行われているものの、経験ポテンシャル測定が不可能である新規材料に関しては適用できない。一方、第一原理計算では新規材料設計は可能であるものの、種々の基板上における圧電薄膜結晶成長の大規模計算は膨大な計算コストを必要とすることから現在行われていない。そこで本研究では、新規生体適合圧電薄膜の材料設計および薄膜創製プロセス設計が可能であるスリースケール構造解析手法の開発、および薄膜創製技術の開発を目的とした。

スリースケール構造解析を用いて新規生体適合圧電材料および最適基板の探索を行った。はじめに、第一原理計算により新規圧電材料探索を行った結果、MgSiO₃が格子定数 $a=b=0.3449\text{nm}$ および $c=0.3538\text{nm}$ 、自発分極 $PS=0.471\text{C/m}^2$ 、圧電応力定数 $e_{33}=4.57\text{C/m}^2$ 、 $e_{31}=-2.20\text{C/m}^2$ および

$e_{15}=12.77\text{C}/\text{m}^2$ を有することがわかった。つぎに、 MgSiO_3 薄膜が高い圧電特性を示し、最小エネルギーで成長可能な最適基板をAu, Mo, FeおよびInの中から探索した。その結果、Au(111)基板が高い圧電特性を示す MgSiO_3 [111]が最小エネルギーで成長する最適基板であることがわかった。

MgSiO_3 薄膜をAu(111)/ SrTiO_3 (110)基板上にRFマグネトロンスパッタリング法を用いて創製した。種々の創製条件のうち薄膜特性に影響する基板過熱温度、ポストアニール温度および O_2 ガス流量に着目し、L27(313)直交表に従い3因子3条件で薄膜創製を行った。 MgSiO_3 薄膜の結晶構造評価をXRDにより評価した結果、 MgSiO_3 [111]が創製できたことを確認した。また、強誘電体テストにより測定した圧電ひずみ定数 d_{33} を目的関数として分散分析により有意創製条件因子を探索した結果、基板過熱温度が1%水準で高度に有意であることがわかった。さらに、応答曲面法により最適創製条件を探索した結果、基板温度が 300°C 、ポストアニール温度が 631°C 、 O_2 ガス流量が 4.0sccm のとき、最大圧電ひずみ定数 $d_{33}=359.2\text{pm}/\text{V}$ を示すことを確認した。最後に、マウス胎児由来繊維芽細胞を用いて MgSiO_3 圧電薄膜の毒性試験を行った結果、生体適合性を有していることが確認できた。

以上のことから、本研究では新規圧電材料設計が可能となるスリースケール構造解析を開発し、それを基に設計した新規生体適合 MgSiO_3 圧電薄膜創製技術の創製に成功した。体内埋め込み型Bio-MEMS デバイスに MgSiO_3 圧電薄膜が利用可能であり、医療産業に大きく貢献することが可能と考える。

第 43 回科学技術研究部会 2011 年 8 月 28 日(土)

安定同位体基質プロービング法を用いた水田土壤中における 植物遺体由来の炭素フローの解明

李哲揆(名古屋大学大学院生命農学研究科)

水田稲作はモンスーンアジアの気候・風土に適合した持続的な農業形態で、地力が高く数100年に亙る連作も可能である。水田における高い地力は、稲ワラや刈株を主とする植物遺体の土壤中での循環によって維持されている。稲ワラは湛水土壤中で二酸化炭素やメタンに微生物分解されるとともに、一部は土壤に特有な有機物(土壤腐植)に変化する。従って、稲ワラの分解およびその後の炭素の流れを突き止めることは、水田稲作の持続性と地球環境への影響を考える上で非常に重要である。しかし植物遺体を施用した土壤では、植物遺体の分解だけでなく土壤中の有機物分解も影響を受けるため、植物遺体の分解と土壤有機物分解に関わる微生物を区別して測定することは極めて困難で、これまで稲ワラの分解に関与する微生物、稲ワラ炭素の循環に係る微生物に関する研究は全くなかった。

環境中における生元素循環を明らかにする手法として近年、安定同位体標識法(Stable Isotope Probing法:SIP法)が開発された。SIP法とは安定同位体で標識した基質(エサ)を土壤に加えて培養し、微生物の核酸等の生体成分を分析することで、安定同位体を同化した微生物の群集を明らかにする方法である。その際、微生物の核酸は基質を取り込んだ「重い」核酸とそうでない「軽い」核酸に密度平衡超遠心操作により分画する。分画した重い核酸を対象にして様々な微生物を解析することで稲ワラ

炭素の食物連鎖に伴う流れを直接解明することができる。

本研究では稲ワラのモデル物質として ^{13}C で標識したイネのカルス(未分化細胞:乾燥後使用)を用い、培養後に ^{13}C で標識された微生物DNAを密度平衡超遠心操作により分画した後、土壤中に微生物環の炭素循環について調べることを目的とした。

まず植物遺体の分解にはBacillus属やActinobacteria属、Proteobacteria属などが関与していることが明らかとなった。また好気的環境にも関わらず絶対嫌気性菌であるClostridium属も検出された。つまりSIP法を用いることで好気的に培養している土壌における絶対嫌気性菌の生育を明らかにすることができた。このことから水田土壌中の代表的な絶対嫌気性菌であるメタン生成菌の解析を行った結果、好気的環境中でのメタン生成菌の生育も確認できた。また土壌中におけるバクテリオファージ(バクテリアに感染するウイルス)が炭素循環に関与していることも突き止め、そのファージのホストであるシアノバクテリアが暗条件で生育している事例を土壌中において初めて明らかにした。

これらの結果よりSIP法を用いることで、土壌中の新たな物質循環系やこれまで未知であった微生物の生態を明らかにすることができた。

第 44 回科学技術研究部会 2011 年 12 月 10 日(土)

いもち病菌に対するコムギ・オオムギ抵抗性遺伝子の同定

玄康洙(神戸大学大学院農学研究科)

1. 実験目的

イネ科植物いもち病菌 *Magnaporthe oryzae* は、イネのみに寄生するイネ菌、アワのみに寄生するアワ菌のように植物属に対する寄生性を異にするいくつかの菌群から構成される。

これまでにさまざまなオオムギ品種に *M. oryzae* イネ菌、アワ菌、シコクビエ菌、コムギ菌を接種したところ、品種ごとに様々な抵抗性/感受性を示すこと、例外的に cv. Nigrate がすべての菌群に感受性を示すことを見出した。さらに、cv. Nigrate を感受性品種とする交雑組合せの雑種集団を遺伝解析したところ、各品種の抵抗性はすべて単一遺伝子座 *Rmo2* に支配されていることが判明した。この反応パターンの相違は、各品種が異なるアリルを保有しかつ各アリルが異なった範囲の複数の非病原力遺伝子を認識することによる。これは、従来レースー品種間特異性を支配する理論として広く受け入れられてきた Gene-for-gene theory に従わない、きわめてユニークな関係である。

本研究では、*Rmo2* 座をクローニングし、各品種のアリルの構造を比較することにより、上記の対応関係がどのようにして成立しているのか、その機構を明らかにする。

2. 材料および方法

抵抗性品種Nakaizumi-zairai(NZ)と感受性品種Nigrate(Ngt)を交雑して得た F_3 集団 91 系統を用いて、SSRおよびESTマーカーによる*Rmo2*の分子マッピングを行った。

3. 結果および考察

NZ x Ngt由来 F_3 を用いてSSRマーカーによるマッピングを行ったところ、*Rmo2*は 7H染色体に座乗す

ることが判明した。*Rmo2* に最も近接した SSR マーカーは、Bmag0206、Bmag0007 で、*Rmo2* はこれらの短腕末端部より 5.1cM のところに位置していた。これらの SSR マーカーを佐藤教授が作成した Haruna Nijo x H602 の EST マップにマッピングしたところ、Bmag0206、Bmag0007 からテロメア側に向けて 40 以上の EST マーカーが存在することが判明した。これらのうち、NZ と Ngt の間で多型を示したものを NZ x Ngt 由来 F_3 を用いてマッピングし、*Rmo2* のテロメア側近傍に位置するマーカーを特定することができた。

現在、*Rmo2* の動原体側近傍マーカー候補を、本領域とイネ(第六染色体)のシンテニーを用いて検索し、*Rmo2* の精密マッピングを試みているところである。

第 45 回科学技術研究部会 2012 年 2 月 18 日(土)

Determination of Local Chirality in Irregular Single-Walled Carbon Nanotubes Based on Individual Hexagons

金チュンハン(京都大学福井謙一記念研究センター)

We have developed a robust theoretical method for the determination of the local chirality based on individual hexagons that compose single-walled carbon nanotubes (SWCNTs). The method and code have been applied to various SWCNT-like irregular structures that are formed during the growth process. The local chiral index (LOCI) and its distribution are well-defined for irregular structures as well as ideal structures of SWCNTs, and can be used to characterize any SWCNT-like irregular structures in terms of local chirality. The present method also permits monitoring the chirality of nanostructures during the growth process using timeevolution LOCI method. The dynamics of the local SWCNT chirality is also discussed.

第 46 回科学技術研究部会 2012 年 3 月 17 日(土)

ヒューマノイドロボットを通じた作業制御アルゴリズムの探求

玄相晃(立命館大学理工学部ロボティクス学科)

概要

果たしてロボットは人間に代わって高度な作業を行うことができるだろうか？ 我々は等身大の2足歩行型ヒューマノイドロボットの研究開発を通じて、人間の運動制御を規範とした実用的なロボット作業制御アルゴリズムを探求している。本講演では、過去に行ってきたヒューマノイドロボットの全身運動制御技術[1]と最近行っている応用研究について簡単に紹介する。

参考文献

[1] 玄相晃, 複数の接地部分と冗長関節を有するヒューマノイドロボットの受動性に基づく最適接触力制御, 日本ロボット学会誌, vol.27, no.2, pp.178-187, 2009.

第 47 回科学技術研究部会 2012 年 8 月 11 日(土)**京都大学での43年間にわたる研究生活**

玄丞然(京都工芸繊維大学繊維科学センター)

私は、1969年4月より京都大学に在籍し、2012年3月31日まで約43年間の長期に渡って学び、また、生体材料学に関する研究と教育を行い、日本人を始め韓国や中国留学生など数多くの研究者を育ててきました。その間、約400報の研究論文、総説や著書、および100件以上の特許出願を行うことができました。さらに、基礎研究を発展させることにより、次のようなメディカルデバイスが臨床応用でき、国の研究投資に対する社会的還元を行うことが出来ました。

1) ポリグリコール酸(PGA)吸収性外科用縫合糸。2) 歯周組織再生治療膜(GTRメンブレン)。3) 吸収性モノフィラメント外科用縫合糸。4) 吸収性縫合補助材。5) 耐摩耗性に優れた人工関節摺動部材。6) 吸収性人工硬膜。7) 高強度・高弾性率吸収性骨折治療材。8) 人体に優しい義歯床。9) 再生医療用幹細胞凍結保存液。10) 機能性と安全性に優れた医療用接着剤、など。

学者にとって研究論文は勿論、もっとも貴重な財産であり評価の基準対象ではありますが、研究者に対する真の評価は、学問と産業にどれだけ貢献したかで評価されるべきであると思います。また、生体材料学は応用科学の一つであるため、論文のみでは価値がなく実用化されてこそ真価が問われるでしょう。その見地からすると、私は誰よりも多くの社会貢献を達成した研究者の一人であると自負しています。これらの業績は京大の恵まれた研究環境の中で生まれたものであり、これまでの共同研究者や関係者に心から感謝しています。

21世紀は未知と不確実性の時代と云われていますが、急激な社会の自由化とIT化に伴い、大学も国際社会とのコミュニケーションが必須となるグローバル化へ飛躍することが強く求められています。このような環境の中で、若い学生には大きな期待が寄せられています。自分自身の未来を切り開くのは新しい知識です。この新しい知識を作るのは「創造力」です。この創造力は自分でしか養えないでしょう。溢れる情報の中から真に有用な情報を得る「判断力」を会得することも重要です。人生には失敗も成功もあり、失敗は苦しいが、そのとき迷わず行動を起こし、自分は他人とどのように違うのか、自分の個性を磨くことが学生生活にとって最も大切なことだと思います。21世紀の諸問題に取り組むには、個性のある創造性を育て自分の人生のシナリオは自分で書くことが肝心でしょう。自分の可能性を信じ、実り多い学生生活に全力を投入し、輝かしい未来を自分で切り開くことが大切です。

私は、さる3月31日をもって京都大学を無事定年退職しました。退職後は京都工芸繊維大学に再就職し、これまでの研究をさらに進展させるとともに、再生医科学の基礎と臨床応用に貢献できるよう、またこれらの研究を通じて独創性を有する 21 世紀型の研究者を育てられるよう、生涯現役の精神を持

って研究と教育に邁進する所存であります。

報告

日本支部 第 6 回理事会及び第 16 回総会 開催

2012 年 5 月 27 日学術大会当日の 12 時より、第 6 回理事会が開催され、2011 年度事業報告・決算と 2012 年度事業計画案・予算案について討議された。

2011 年度事業報告では、同年度の特徴的な内容として、『在日コリアン辞典』初版第 1 刷の在庫が残り少なくなり、第 2 刷が出版され、その際、誤字・脱字のチェック、加筆・修正を行ったことが報告された。

2012 年度事業計画案としては、学会誌『コリアン・スタディーズ』を今年度末の 2013 年 3 月を目標に発刊することが報告された。現在、鄭雅英編集委員会委員長を中心に、投稿規定、執筆要項が作成され、編集委員会にて活発な議論と投稿原稿の募集、レフェリー制の導入などの作業が進められていることが報告された。高龍秀会長も学会誌の発刊について強い意志で進めることを表明した。この学会誌の発刊事業を通して、学会活動の広報に努め、飛躍的な会員拡大を図っていくことが重要であるとの認識で一致した。

青巖大学校在日コリアン研究所の一行が日本支部を訪問(4 月 4 日)し、チョン・フィソン所長を始め、金仁徳博士等 5 名と事務局員が懇談した際、『在日コリアン辞典』韓国語版の出版作業は再校段階に入っており、暫く後に出版されるだろうとのことであった(9 月に出版された)。

また、今年度も例年同様、人文社会研究部会および科学技術研究部会の活動を積極的に行っていくこと、この 2 つの研究会を通じて、主に若手研究者の研究活動を支援していくこと、特別講演会は従来の通り適時開催することが報告され、了承された。

理事会終了後、第 16 回総会が開催され、上記の通り 2011 年度事業報告・決算と 2012 年度事業計画案・予算案が報告され、承認された。

日本支部 第 15 回学術大会 開催

日 時: 2010 年 6 月 5 日(日) 場 所: 大阪教育大学天王寺キャンパス 中央館 2F
プログラム:

[午前の部] 10:00～11:45 自由論題報告

< 第 1 教室 > 司会: 鄭雅英(立命館大学)、裴光雄(大阪教育大学)

1. 森類臣(立命館大学コリア研究センター)「日本メディアによる『北朝鮮』報道の論理—韓国哨戒艦沈没事件・延坪島砲撃事件の新聞報道分析を中心に—」
2. 堀田千里(広島経済大学)「国家や人種の境界をこえて: 1920 年から 1945 年の、在阪朝鮮人の経験とシカゴの黒人の経験との比較研究」
3. 金香海(延辺大学国際関係学部)「中国東北部における開発と延辺州」

<第2教室> 司会:文京洙(立命館大学)、伊地知紀子(愛媛大学)

1. 韓南洙(ハングル学会関西支会)「朝鮮語辞書の字母順序について」
2. 任正赫(朝鮮大学校理工学部)「京城帝国大学に関する植民地政策史および科学史的考察」
3. 小林聡明(東京大学大学院総合文化研究科)「沖縄復帰と韓国人慰霊塔」

◎第4回理事会、第 15 回総会 12:00～13:30

[午後の部] 13:30 ～ 17:00

シンポジウム「在日コリアンをめぐる今日的課題」

1. 「高校無償化問題と朝鮮学校」 報告者:板垣竜太(同志社大学)
 2. 「政治資金規制法と在日社会」 報告者:丹羽雅雄(弁護士)
 3. 「大震災と在日コリアン」 報告者:金宣吉(神戸定住外国人支援センター)
- コメンテーター:高賛侑(ノンフィクション作家)、金守良(朝日病院長)、朴才暎(民族を考える会)
 総括コメント:朴一(大阪市立大学) 司会:高龍秀(甲南大学)

* * *

第 10 回コリア学国際学術討論会 開催

コリア学国際学術討論会は、2 年に一度世界各地を巡回して開催される国際高麗学会の世界大会である。2011 年は、8 月 23 日から 25 日にかけて西部カナダ屈指の名門大学であるブリティッシュコロンビア大学(以下、UBC)で開かれた。本大会は、UBC アジア研究科コリアン・スタディーズおよびコリアンリサーチセンター(以下、CKR)の協力を受けて開催されたものである。



8 月 24 日午前に CKR 朴慶愛所長の司会進行のもと開会式が行われた。基調講演は、国際高麗学会鄭光会長による歓迎辞の後、高麗大学校の鄭泰憲先生による「南北歴史認識の収斂・共存の可能性と歴史学(者)の交流への展望」、金ジョンヨン先生(朝鮮社会科学学院)の「主体性と民族性が見事に具現された平壤民族公演」、徐永彬先生(対外経済貿易大学)の「小品文精神の批判的継承と東洋美学の視角-尹五榮に対する中国文学の影響-」、宋南先先生(大阪経済法科大学)の「民主主義と在日同胞」の 4 本であった。朝鮮半島南北そして日本のコリアンによる基調講演を同じ場所で一度に聴くことができるという、本学会の世界的意義を見事に具現していたといえよう。

開会式の後、各分科会に分かれ世界各地から一堂に会した参加者がそれぞれの日々の研究成果を報告した。分科会は、歴史・言語・文学・社会／教育・経済・政治・芸術／民俗・哲学／宗教の 8 つであり、報告数は総計 68 本、総参加者は 115 名であった。日本支部からは、高正子(神戸大学)「在日コリアンが継承する民族芸術の変遷」、尹明憲(北九州市立大学)「韓国の技術革新戦略と環黄海地域

での技術提携の可能性」、梁仁実(岩手大学)「帝国日本を浮遊する映画(人)たち」、伊地知紀子(愛媛大学、現在大阪市立大学)「日本帝国圏内の済州島出稼ぎ海女」他、計 16 本の報告が行われた。

本討論会には、毎回世界各地のコリアンそして多様な国籍の研究者が集うのだが、私はたまたま晚餐時にブダペシュト・エトヴェシュ・ローランド大学(ブダペスト大学)で韓国哲学を教えておられる研究者と隣席になり、彼女が韓国哲学を学ぶようになった経緯などを伺ったりしながら、こうした出会いの場の貴重さを実感したのだった。今回、会場には UBC へ留学している北朝鮮の研究者も傍聴に来ておられた。本討論会の開会式で司会を務められた朴慶愛先生は、カナダと北朝鮮間の交流と外交を推進する上で重要な役割を果たし、カナダへの北朝鮮代表団の訪問を主催している。また、長期学術交流のために北朝鮮の研究者を UBC で受け入れる、カナダ・北朝鮮ナレッジ・パートナーシップ・プログラムを北米で初めて設立したという実績の持ち主である。UBC はただ訪れるだけでも非常に美しく築かれた大学(町とっていい)であるが、さまざまな可能性を生み出している会場でもあった。

次回開催地は中国・広東外語外貿大学である。世界各地からの参加者への対応、宿泊、食事などきめ細かい配慮の行き届いた準備と当日のプログラムを見事に進めてくださった本部スタッフの方々に厚く感謝と敬意を表したい。(伊地知紀子)

書籍紹介

金俊行著『現代アジアとグローバリズム』(東洋経済新報社、2011 年)

裴光雄(大阪教育大学)



本書は日本支部会員の金俊行氏による、前著『グローバル資本主義と韓国経済発展』(御茶の水書房、2006 年)に次ぐ単著である。同著は東洋経済新報社のテキストブックシリーズの 1 冊でもある。

本書の構成(目次)は次の通りである。第 1 章 グローバリズムとは何か、第 2 章 軍事グローバリズム、第 3 章 グローバリズムとアジア、第 4 章 パクス・アメリカナの崩壊、第 5 章 協調的グローバリズム、第 6 章 東西冷戦終結、第 7 章 金融グローバリズム、第 8 章 アジア通貨危機、第 9 章 暴走するグローバリズム、第 10 章 グローバリズムと地域共同体、終章 ポスト・グローバリズム。

本書の特徴を一文で表すならば、著者の鋭い理論という横軸と世界経済の現代史という縦軸が博識な内容をもって見事に整合的に編まれて、展開されている高著だと言えよう。具体的に紹介したい。著者の本書を一貫する理論的枠組みは、第 1 章で精緻に論述されている。グローバリゼーションとグローバリズム(p.12)の項で、著者は次のように述べている。

グローバリゼーションは、グローバリズムと似て非なる言葉だ。似て非なる言葉は分けて使った方がいい場合がある。結論からいうと、著者はグローバリゼーションを「多様な資本主義による相互依存関係の拡大深化」、グローバリズムを「アメリカ型システムの普遍化」と定義することで分けて使っている(金[2006])。そして前者を資本主義の内在的必然としてこれを肯定的に理解することから考察を始め、後者を歴史的にも理論的にも正当性のない霸権的イデオロギー(思想的傾向)にすぎないとしてこれ

を批判する。

グローバリゼーションを肯定的に理解できるのは、国際分業の利益という理論的正当性からだと言う。

このようにグローバリゼーションとグローバリズムというキーワードの概念を著者の視点で明瞭に定義化してくれるおかげで、読者は次章以降の文章を読み進め、論点を整理して学習するのに大いに役立つ。また、各章末の(学習の)ポイントは、再整理するのに評者も大変助かった。コラム、用語解説はテキストとしての役割を大いに果たしている。

第 1 章は単に、理論的整理を行っているだけでなく、そのことを通して現代世界経済・国際経済体制の問題点・課題を鋭くあぶり出している。ここで明らかにされた問題点・課題は続く第 2 章から第 10 章を経て、終章で著者の英知が結集された解決策が提示される。第 1 章と終章の見事なまでの整合性と、その間の諸章の展開の「美しさ」に評者は感嘆したことをまず論じておきたい。

第 2 章から第 10 章までは、次のように描かれる。グローバリズムが戦後の東西冷戦の成立とともに軍事的グローバリズムとして現れ、アジア諸国(典型的には韓国)を同盟国に組み込みながら、開発独裁、外資導入輸出工業化政策を支え、影響を及ぼしていく。パクス・アメリカナの崩壊を経て、グローバリズムはブラザ合意に典型的に見られるように協調的グローバリズムに変容する。東西冷戦終結後、グローバリズムはウォール街ヘゲモニーによって金融グローバリズムへと変容し、アジア通貨危機を引き起こす暴走するグローバリズムへとまさに「暴走」する。暴走するグローバリズムに対抗すべく、ヨーロッパ統合の経験を「財産」に、東アジアにおいて地域共同体が域内金融協力として展開していく過程を構想と試練というタームで論じている。これらの章間の展開は、まさに著者の卓越な構成力を示していると言えよう。

本書は『現代アジアとグローバリズム』という書名の通り、現代アジアの政治経済およびグローバリズムとは何か、について明快に伝えてくれる。また、世界経済、国際経済の著としても、初学者から専門の研究者まで広く読まれるに値する高著でもある。

編集後記 通信から学会誌へ

本「国際高麗学会日本支部通信」は今号をもって最終号を迎えることになりました。「巻頭言」にも記されているように、日本支部では「通信」を発展的に解消し、来年度から新たに学会誌『コリアン・スタディーズ』を発行することになったものです。

思い起こせば、1990 年に国際高麗学会が結成され、93 年に「日本支部通信」が創刊されて以後、19 年間に 30 号を数えました。通信は、学術大会をはじめとする各種イベントや会員諸氏の論文、著書などをご紹介する役割を担ってまいりました。この間、通信発行のために多大なご協力をくださった皆様に心から御礼申し上げます。

2013 年から毎年 1 回発行される『コリアン・スタディーズ』は、朝鮮半島および朝鮮民族に関するあらゆる分野の学術的な論文、研究ノート、書評等を掲載しつつ、日本支部の特色を生かした学術レベルの高い学会誌として発展していくことでしょう。

会員諸氏には、従来以上に積極的なご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。(K)